

猿山：ブック・レビュー『〈識字〉の構造——思想を抑圧する文字文化』菊池久一著

ブック・レビュー
『〈識字〉の構造——思想を抑圧する文字文化』 菊池久一著

猿 山 隆 子

Book Review
Kikuchi Kyuichi, “〈Shikiji〉-no-kouzou,
Shikou-o-yokuatsu-suru Moji-bunka”

Takako SARUYAMA

1. 多元価値の共生を目指すための〈識字〉の理解——本書のねらいと構成

本書は、「私たち自身の識字観を問い直すための一つの試みとして」識字の意味を社会的文脈の中で問い直そうという趣旨から書かれたものである。識字論（リテラシー研究）や文化研究（カルチュラル・スタディーズ）を軸にした社会言語学、教育学を専門とする著者は、これまでの識字研究を「識字そのものを中心テーマとして、社会と言語、人間を考えていこうという意図はあまり見えてこない」と批判的にみている。そこで、著者は、「なぜ識字なのか」という問いに対して、「〈識字〉は、〈文化〉を理解するための単なる一つの指標にすぎない」が、「多元価値の共生を目指すためには、やはり〈識字〉を理解することが必要だ」と述べている。それは、「多元価値が権力の強弱をとまって存在する文化の中では、……〈教育〉や〈識字〉によってある価値が他の価値を〈抑圧〉するシステムとなること」からである。そして、著者は、識字の獲得をめぐる生まれる識字の暴力を明らかにし、多元価値の共生を目指すため、私たちの識字観を変えることの重要性を主張している。

序では、議論を進める上での前提として、識字 Literacy という言葉のニュアンスの違いがあることを指摘している。そこで本番では、技術としての読み書き能力という意味で、技術的側面に限定される場合には、〈識字術〉、その技術を用いる人間解放の営みやそれを用いる場（社会）における人間同士の権力関係をも含む言葉として、広い意味で用いる場合には〈識字〉、と区別されている。さらに、「識字術は確かに一つの技術であるが、それを持つ者と持たない者の間に存在する力関係とは無関係の、中立の存在では有り得ない」ことが強調されている。

本書の構成は、以下の通りである。

構成

序

- 1 識字の暴力
- 2 制度化された識字

- 3 〈不耕貧食〉の識字
- 4 〈識字〉と〈識字術〉
- 5 識字の希少性
- 6 識字研究の必要性
- 第一章 識字研究の諸相
 - はじめに
 - 1 識字の大分水嶺理論
 - 2 識字の認知心理学
 - 3 〈意識化〉と識字：パウロ・フレイレ
 - 4 〈機能的識字〉
 - 5 〈批判的識字〉
 - 6 レイ・リテラシー
 - 7 「識字の危機」の背景
 - 8 識字の歴史的変遷
- 第二章 識字とディスコース
 - 1 識字社会言語学
 - 2 ディスコースとイメージ
 - 3 学際性
 - 4 〈生態的識字〉
 - 5 コンテキストのジレンマ

第三章 識字と社会

- はじめに
- 1 差別を生み出す識字
- 2 手話言語と発話言語
- 3 識字とコミュニティ
- 4 アーミッシュの識字観
- 5 「教育の歴史は文字使用の歴史である」
- 6 識字の将来

2. 各章の要約

(1) 「識字研究の諸相」——社会的文脈の中で識字の意味を問い直すことの必要性——

第一章は、識字研究の諸相として、従来の識字研究を概観し、その中で識字をどう捉えるべきかを考えていくものである。そして、「なぜコミュニケーションを促進するはずの識字術が、人間性を失わせ、人間を疎外する道具としても使われるのか」という識字の暴力への疑問をもとに、これまでの様々な識字の捉え方を提示している。

まず、従来の識字研究では、「識字術自体は一つの技術に過ぎないかもしれないが、識字が識字術そのものであるように語られることも多」く、「古い識字観では、……識字術を獲得す

ることを通して可能となる教育の過程が、人間の精神空間形成に大きな影響を及ぼすと主張することで終わる」と指摘している。

また、代表的な識字研究として、パウロ・フレイレの識字理論に言及している。フレイレの理論が「識字を受動的に与えられるべきものとして捉える〈機能的識字〉とは正反対に位置すると考えられる。」にもかかわらず、「〈機能的識字〉の概念と容易に結合できる」のは、「〈識字の物質性〉を正確に捉ええなかったからかもしれない」と述べている。すなわち、フレイレは、「その置かれた環境の中でさまざまな形に変容させられる」識字の物質性を把握していなかったため、識字を普遍的な技術として捉えられる余地を残し、フレイレが否定するはずの単なる読み書きの技術になりさがる場合もある、と著者は指摘している。

さらに筆者は、「識字の基準は、社会的経済的変化とも密接に関係」していることを指摘する。制度化された識字の基準は常に変わるものであり、しかも常に基準は上げられるものであるため、「識字は、今も、そして、将来も、それを獲得できない者にとっては、必然的に暴力的なものになるのである」と述べ、識字を単一で、普遍的な技術と捉えたと、識字が識字術になってしまう危険性を明らかにしている。

(2) 「識字とディスコース」——複数概念としての識字——

第二章では、まず、従来の識字観に修正を迫るものとしてジー (Gee, 1991) のディスコースの概念を組み込んだ識字理論を取り上げている。著者は、「人は、……ディスコースを所有しているが故に、話したり書いたりできるのであり、また人それぞれが異なったディスコースを持つに至るのも自然の成り行きである」という前提にたち、ジーの理論を以下のように紹介している。『社会的ネットワークの中で成長するかぎり、あらゆる人間が習得する』第一のディスコースと『公的な場で必要とされる』第二のディスコースがある。識字は学校特有の第二のディスコースであり、現代における識字を『第二のディスコースの駆使、もしくはそれを自由に操ること』というジーの識字の定義、さらにジーが重要なこととして指摘している「知識の獲得だけなら学習によって可能であっても、完全なディスコース（もちろん第二のディスコースも含む）の獲得は、習得によってのみ可能である」点から、筆者は、「識字は、識字術のみでは有り得ず、ものを書いたり、読んだり、それを評価したりするという要因も含まれる、ある社会的ネットワークの中で意味を持たされる、人の生そのものと直接係わるものとして」捉えなければならないと指摘する。そして「識字は、ものを考え、論じ、話し、読み、書き、聞き、また評価するというようなディスコースであり、コンテキストの中に置かれて初めて意味をもつ活動」であることを強調し、それゆえに、「中立的技術として捉えるべき単数の概念ではなくて、さまざまな状況に応じて存在する複数の概念として捉えなければならない」と主張するのである。

そして、著者は、「読み書きは、単なる『読み書き』という中立的技術では有り得ない。読み書きには、『何か』という目的語が伴うものであると理解しなくてはならない。……にもかかわらず、従来の識字観では、イデオロギーを持たせまいとして『何でも』読み書きできる識字術の獲得を目指してきたのである。それは、一見政治的にも中立であるかに見える。しかし、

……実際には、『標準的』という形容詞のつく識字、すなわち『何か』に相当するのが『標準』であるという、極めて政治的なものでもあるのだ」と指摘し、識字教育の政治性を隠すことは、「自民族中心主義」になるものだと認識することの重要性を強調している。

(3) 「識字と社会」——教育のあり方と識字——

第三章「はじめに」では、識字術が、「学問的知識の伝達の道具として用いられるだけでなく、人が日常生活の中でも用いたりする、あらゆる〈場〉に適応可能」であり、識字術そのものが中立的で普遍的な技術だと考えられていることを問題にしている。そして、そのように考えられているのは、「学校での識字のモデルが、異なった経験・思考によって形成された識字でものを考えることを奨励するものではなく、さまざまな学問的ディスコース、すなわち学校で用いられる第二のディスコースを習得することを最終目的にした」ものであり、制度としての学校教育に原因があると指摘している。

そこで、著者は、「識字の根源的暴力を認識し」、「私たちの従来の識字観を変える」ために、アーミッシュの人々の識字観を紹介している。「学校も家庭も、それぞれの教会を中心とする一つのコミュニティーを形成し」、「コミュニティーで生きていくのに必要としないような、抽象的知識の獲得を目指すものではない」アーミッシュの独自の教育方針は、「彼らにとっての（8年生以上の）教育とは、自己啓発、独立、他人に対しての権力の獲得、そして簡素な生活の軽蔑を意味する」ものであり、「識字の獲得を社会階層をあげるための手段として用いるのでない。」。こうしたことから、アーミッシュの人々は、「人間はそこに『居住』しているコミュニティーから切り離しては存在できない」こと、「教育の過程そのものの中に、識字の暴力を生み出す原因があること」を認識したのではないかと指摘し、識字観は文化によって形成されるものだと述べている。

そして、著者は、アーミッシュの人々の識字観から、「識字の暴力を決定的にするのは、識字術それ自体ではなく」教育によって獲得される知識、あるいは識字を、文化を無視し、中立的で普遍的なものとする「教育の過程」そのものにあるのだと結論づけ、そうした視点から、試験、点数化など教育の歴史での「教育の過程」における暴力性を分析している。

3. 本書の特徴と評者の所感

本書の第一の特徴としてあげられるのは、識字の捉え方において、「識字」と「識字術」と明確に区別していることである。著者は、識字が、識字＝識字術として扱われることが多いことを問題視し、識字術を技術としての読み書き能力・技術として捉え、識字を「識字術のみでは有り得ず、ものを書いたり、読んだり、それを評価したりするという要因も含まれる、ある社会的ネットワークの中で意味を持たされる、人の生そのものと直接係わるものとして」捉えている。

日本における「識字」というと、識字運動などに結びつけられるように、文字の読み書きを学ぶ機会を失われた者に対する教育として受け止められがちであり、識字＝読み書き能力という捉え方が一般的であろう。しかし、識字学級などの報告で見られるように、文字の読み書き

が困難であった人びとにとって、識字学級で識字術を学ぶ活動とは、単に文字の読み書きの獲得を求めるだけではなく、仲間とともに学び合う中で、人として生きる権利の表明であったり、識字の暴力に対する訴えを背景とするものであったりする。著者が取り上げている「識字」の概念とは、このような文字を使って生きる人びとの生き方そのものとして捉えることができる。

また、「識字」と「識字術」の二つに区別することで、著者は、識字が暴力を生み出す原因を探っている。例えば、学校教育で行われる識字術では、「識字術を持つ者と持たざる者に一線を画し、……はっきりとした順位が付けられる」というように、識字術自体にも暴力はあり、さらに、その暴力を決定的にするのは、識字を獲得する教育の過程に問題があるのだと指摘している。国家の発展のため、識字を制度化することによって、個人の発達のための識字ではなく、技術としての識字を重視しており、主流派の識字を押しつける傾向にあること、さらに、そうした識字の教育によって、識字が普遍的な技術だと捉えられることにより、識字の過程において、さまざまな価値観や態度、思考力などを習得することがおざなりにされ、コミュニケーションの手だての一つであるはずの識字が、人間が生きていく上で、文化や他者との相互理解において暴力となることを述べている。

日本は今や文字なくしては生きられない社会であると言える。そして、学校教育の中で、識字を習得するという認識が強いだろう。そのために、義務教育就学率が100パーセントに近い日本においては、文字の読み書きが困難な人がいるにもかかわらず、そうした人びとの存在自体を認識することも難しい。それと同様に、私たちの多くは、日本において、文字の読み書きは当たり前のことと捉えており、私たちににとっての識字とはどういうことなのかを客観的に認識することは難しい。そして、より高い学歴、より高度な識字術をもつことが経済的、社会的な成功につながるといった認識も強く、識字術の習得の有無で人間を測るような識字の暴力が存在する。

そうした識字への認識によって、文字の読み書きの困難な人びとが識字を学ぶ際に、文字の読み書きができることが何よりも素晴らしいことと過大評価し、文字を獲得する以前に目と口で遅く生きてきた人生の営み自体までも無意識に否定しまいかねない。文字の読み書きができる人びとが大半を占める社会では、多くの人びとは識字がコミュニケーションの手だての一つだということを忘れてしまっているのではないだろうか。今の日本社会で、文字の読み書きを学ぶ機会を奪われた人びとがとる道は、そのような識字観のままに同化して、識字を獲得することしかないのだろうか。そして、私たち全体の問題である識字とどのように向い合うべきなのだろうか。この問いに対して、以下のような特徴が挙げられる。

第二の特徴として挙げられるのは、従来の「識字は中立で普遍的だ」という識字観から解放されるためには、異質の識字観が必要である、と述べていることである。それは、異なった文化を理解するためには、他の文化を自分の文化と比べ、異質だと感じる事が自らの文化に根ざした意識から生まれるものであることを認識することによって、違いが豊かさにつながるような相互理解が生まれるということから理解できる。

著者は、「識字術は根源的に暴力であるが、識字の実践なしに識字術の根源的暴力を捉えることができない」と指摘し、異文化の人間との出会いの例を挙げながら、「それぞれのコンテ

クストにおける識字を理解するためには、標準的識字を必要とし、また標準的識字（の暴力）を理解するためには、個別の識字を必要とする」と述べている。そして、「標準的識字」がある文化的背景をもつ「標準的」という政治的なものであることを認めた上で、議論していくことを奨励している。そのようにして、識字の暴力性を認識し、識字術を学ぶ教育の過程で、他者を抑圧する手段として使うことを避けるための努力が必要だと述べている。

社会では、「標準」と呼ばれるような社会的に優勢な識字観が「正当な識字観」として固定され、社会に定着していく。この関係は、例えば、共通語と方言の関係でも見られるだろう。さまざまな方言をもつ人びとがコミュニケーションを図るための手だての一つとして、共通の言葉を操れるための術を学ぶのは必要なことではあるだろう。そのこと自体は、価値観や考え方の標準としてあるのではないし、文化の優劣を決めるものでもない。しかし、人びとの中で、共通語と方言に対しての認識の中には、「中央」と「地方」といった一定の力関係が存在することが見て取れることが多い。

このような、社会的に優勢な識字観が「標準的識字」であり、その正当性を主張するような、力関係に支配される識字の暴力が生まれるのは、識字が中立的で単数の概念であるという認識があるからだ、と、著者は指摘する。こうした暴力を解消するための方法を具体的に提示している点が、第三の特徴である。

第三の特徴は、識字は使われる環境の影響を受けるものであり、識字も思考も複数の形態を認めるべきだとする考え方である。著者は、「識字活動はある特定の社会的文化的状況に応じて意味を持つものであり、識字は、中立的技術として捉えられるべき単数の概念ではなくて、さまざまな状況に応じて存在する複数の概念として捉えなければならない」と述べている。

識字というと、文字の読み書きをもとにした活動であるという捉え方が一般的であるが、文字の読み書きの機会を奪われた人びと、また、視覚障害者、聴覚障害者などを含めて、文字の読み書きが困難である人びとにとって、そのような識字は暴力としてしか機能しないものになってしまう。現実には、文字の読み書きを学びつつ、それ以外の表現方法でコミュニケーションを図る実践や、障害者が声を上げて作った識字学級では、文字の読み書き以外の表現方法を使って学んでいる実践が行われている。こうした活動は、著者の捉え方からすると、識字を文字の読み書きに限定せず、声や手話なども識字の手段として考えていく可能性を示唆するものとなる。

私たちが識字術を獲得する中で重要なのは、識字の概念を文字の獲得のみに限ることなく、それぞれの生活や文化に基づくものだとの前提から識字の概念を広げていくこと、そして、識字の暴力を認識し、他者に対する暴力を排除していくことであるといえる。読み書きの文字だけでなく、コミュニケーションとしてのさまざまな表現方法を識字活動に含めて理解していくことは、集団や個人の生活に根ざした文化活動であるという方向に、識字の概念を広げることになり、文字を「持つ者」が「持たない者」に対して、「かわいそう」と同情で見えるような構図ではなく、「持つ者」、「持たない者」がそれぞれの価値を認め合い、対等なものとしてコミュニケーションをはかれる方向に道を拓くのではないだろうか。

また、識字の暴力性が第三世界や文字を奪われた人びとの問題だけではなく、私たち全体の

身近な問題であることを理解するためには、共通要素をもった自らの体験がなければならないのではないだろうか。そのためには、ある特定の問題を取り扱うだけでなく、身近な生活に引きつけて理解していくことと、私たちが使う識字術には常に暴力性が存在しているということに目を向けて、自らの識字というものを問い直す機会を得ていけるような場を作り出すことが重要ではないだろうか。

本書では、抽象的な議論が多く、著者の識字観が具体的方策としてどのように展開されるのかについて述べられていないが、日本における教育、識字について、私たち「識字者」の思いこみを考え直す必要性を感じさせるものであった。それは、現在、日本で行われている識字の活動においても重要なことである。識字とは、自らの経験を生かしながら、文字の読み書きに限らず、読む、書く、話すといったことば全体を使い、そこから新たな自らの思考や価値観を作り出していこうとするものであり、学校教育における識字術とは文字と学習者との関わり方が異なる。しかし、識字の学習について、その指導する側の認識としては、識字の暴力性を告発し、技術として識字を捉えることを否定しているにもかかわらず、実際の活動の展開においては、指導者側と学習者側の識字観の違いがあるようにも思える。識字の暴力を受けてきた学習者にとって、識字術を獲得することは大きな喜びであり、生活が大きく変わるものでもある。だからこそ、指導者、学習者それぞれが識字をどのように捉えているのか、学習を進める上で前提として「識字」を再認識する必要があるのではないだろうか。

また、「識字」観を再認識するために、識字活動における、読む、書く、話すといったことばが他者とのコミュニケーションの中でどのような要素を持ち、どのように関連し合って学習が展開していくのか、また、文字の読み書きを獲得する機会を奪われた人びとが識字術を獲得するまでのプロセスで身につけている、ことばによるコミュニケーションの方法が、識字術を獲得することによってどのような影響を受けるのかも検討する必要がある。こうした識字活動の分析・考察から、私たちが見落としてきた識字の役割を改めて認識することができるのではないだろうか。そして、私たちが生活する上で欠かすことができない識字の問題を、少数派のものとしてではなく、多数派に属する私たち自身が捉え直し、それを生きていく上でどのように活用していくのかを問い直さなければならないことと実感している。